



学会に参加するため、久しぶりに大阪に来ている。いまは中之島のコンビニの窓際で朝食を食べながら、ぼんやりと大通りを眺めている。平日の朝7時過ぎだから、交通量は多く、いろんな人が目の前を通り過ぎていく。隣の女性は朝ラーをかきこんで、そそくさと立ち去っていく。ひとが同じくらいのスピードで歩いている。ゆっくり歩いている人が逆に目立つ、それは高齢者だったり、足の悪い人だったりする。そして目の前を通り過ぎる人は誰一人、コンビニの中から見つめている私に気づく人はいない。都会のなかで、ぽつんと存在する孤島にいるような不思議な感覚だった。

#### ▼感覚を開いていくこと、閉じていくこと

人類学者の山口未花子氏は、カナダの狩猟民カスカとともに暮らし、獲物を狩ることで自然と同化していくプロセスを語っている。“自然の中でいろんな情報を分析しながら動物を獲る時は見るもの、聞くもの、匂い、体の動き、すべて都市にいる時と違う知覚にならないと、獲物は獲れない。”「ヘラジカの贈り物」

彼女はカナダから東京に戻り雑踏の中に立ちつつ、膨大な音と情報の洪水に襲われ交差点で身動きできなくなる。ヘラジカの世界に同化した身体は、東京のど真ん中で混乱してしまうのだ。その時はじめて、都会で生きることの不自然さ、不要な情報を切り捨てないと都会では生きていけないことに気づく。人間という生き物は、自分たちの作り上げた複雑な文脈のなかで生きている。そのルールは法律や倫理の言葉で書かれ、さらに文字にならない文化に刻みこまれている。もちろん狩猟民にも文化は存在するが、そのルールは都会人とは全く異なるものであろう。

#### ▼あなたは何ものなのか

狩猟民と都会人、山口氏は、その両方を行き来しながら文化人類学者としてのキャリアを歩んでいる。人間はまことに不思議な存在で、旅人のように別世界を自由に行き来できる。おそらく動物にはそれができない。人間のみになんか許されるのは、やはりヒトが言葉を持つからであろう。もちろん、言葉をもつ故の苦悩もあるのだろうが、さまざまな世界を旅するヒトという生き物は、本当に興味深い存在だ。胡蝶の夢—自分が人間であるこの世界が現実なのか、夢でみた蝶となった世界が現実なのか—、そのような流動するあり様それ自体が、ヒトにとってのリアルかもしれない。山口氏の話を読みながら、自然と都市、動物と人間、そしてヒトとして生きることのダイナミズムを、感じずにはおれない。



鳥取大学医学部  
地域医療学講座  
教授

谷口 晋一  
(たにぐち しんいち)